体育科教員のアダプテッド・スポーツの捉え方と授業実践の現状と課題に関する研究

村上　遥菜　（広島大学）

１．目的

本研究の目的は、体育科教員がアダプテッド・スポーツをいかに認識し、そしてどのような意図で授業実践に取り入れているのか、その実態や課題、また教材としての可能性を明らかにすることであった。

２．研究方法

１）調査対象と調査方法：まず、教員におけるアダプテッド・スポーツ（以下，AS と略記）の認知や認識の実態を他の職業との比較から明らかにするためにアンケート調査を行った。対象は、無作為に回答を得た 505 名であった。さらに、AS に関する授業実践の現状と課題を明らかにするために、授業実践の経験を有する現職教員 2 名を対象とした。2 名の担当科目は保健体育であった。

２）分析方法：アンケート調査に関して、結果の集計や分析は、Excel2019 に回答データを入力し、単純集計、クロス集計を行った。また、分析ソフト js-STAR を用いて χ^2 検定を、さらに有意な差がある場合、多重比較を行った。なお、その項目の中で特に有意な差があるものについて明らかにした.

３．結果と考察

１）教員における認知度は他の職業に比べ、比較的高いという結果であった。知るきっかけについて、教員は学校において AS という概念に触れたという回答が多かったため、アダプテッド・スポーツは学校と関係があることが示唆された。

２）教員に焦点を当て、AS に関する認知について分析した結果、認知度は不十分であった。全体の半数が「単なる障害者スポーツである」と回答していたり、「パラスポーツの種目しか思い出すことができない」という回答があった。松原（2008）によると、AS についての浅い認識は、授業において生徒に偏った障害観を与えかねないと指摘している。このことから、教員における認知度は高いものの、認識について十分とは言えないため、研修や研究授業などで詳しい情報を得たり、交換したりすることが必要であろう。

３）教員における認識の浅さの原因についてインタビューの内容から、教員における学習の機会の少なさ、授業づくりに要する時間、教材としてのコストを含めた継続性、の 3 点が考えられた。

４）教材としての AS の可能性として、様々な価値を受け入れられる心の涵養、子供達における運動能力の不均衡の緩和、教材開発への新たな視点の 3 点が挙げられた。先行研究から、子供達における運動能力の不均衡の緩和、教材開発への新たな視点については、今回の研究を通しての新たな知見として提案できるものであろう。本研究を通して、先行研究から見られなかった AS の価値を見いだすことができたように、様々な価値を秘めた教材であると考えられた.

４．主な参考文献

１）松原豊，アダプテッド・スポーツの授業を通した障害理解推進に関する研究，日本体育学会第 59 回大会号：271，2008.

２）飯田研吾，日本の障害者スポーツを取り巻く環境，Sportsmedicine，128 : 34-35，2011.